

## 6. 人間観

### 6-1. 人間の分類

#### 6-1-1. 年齢による人間の分類

ポンペ ponpe 赤ん坊

メノコ menoko 女

メノコポ menokopo 女の子

オクカイ okkay 男

[増野光教氏]

#### 6-1-2. 技能による人間の分類

隣の伊良家には、伊良チカラ氏（菊池氏の父）がカムイノミをする人だったので、祖母に連れられてよく行った。

[増野光教氏]

伊良チカラはアイヌのブリが強く、ハウエピリカ hawepirka(声が良い)だったので、カムイノミがうまかった。それでかえって人に嫌われることもあった。同じカムイノミでも他の人と比べ倍も長く祈った。たとえば、人がどこか遠くへ仕事に行ったり、山へ行くとき、海に出るとき、何かちょっとしたことがあれば必ず伊良がカムイノミをする。また、その人が無事に戻ってきたときにもカムイノミをする。これは、本人に頼まれてするのではない。

[増野光教氏]

カムイノミでは理論正しく心をこめて祈りごとを言わなければならない。

[地主義雄氏]

父（伊良チカラ）は、私が生れたときは漁師になって、沖の船頭であった。木材の流送も、またぎもベテランだった。

[菊池カヨ氏]

増野氏の父は「親方」で、舟を持っていた。沖の仕事では伊良チカラをしのぐものだった。

[時田岩吉氏]

明治年間、木彫のコンクールで白糠のアイヌが優勝した。指物大工の時田寛助という人だ。

[地主義雄氏]

#### 6-1-3. 身分・家系

ヌサ nusa（祭壇）は部落共有であったようで、個人個人では作らなかった。ヌサは人通りのない所に作った。有名なエカシ ekasi（おじいさん）がいる家ではヌサを作ったようだ。私の知る限りでは、伊良チカラ氏の家にはヌサがあった。家から2、3百メートル離れた所に作

った。ヌサにはカムイノミ kamuynomi (神に祈る) のとき、ドブロクを持って集まる。イナウ inaw (御幣) には個人個人の印が入っていて誰のものかわかる。私は伊良チカラ氏に連れられて、カムイノミ kamuynomi に行ったことがある。トゥキ (杯) tuki をもたされてカムイノミ kamuynomi をした。カムイノミのとき、コタンコロクル kotankorkur (村長) が、おまえは海の神に、おまえは山の神にというふうに指図する。私は子どもだったから、トゥキ tuki を持って心の中で祈った。小学校5、6年生位の時だ。伊良さんと同じく、ヌサを持っている家があった。各集落に一つはそのような家があったようだ。昔は5、6軒ずつかたままって集落を作っていたが、その一つ一つに有力者と言えるような人がいたようだ。

[増野光教氏]

イナウにはイトプパ itoppa を付けた。血統を表すものらしい。

[増野光教氏]

明治38年釧路春採生まれ。父母は早くなくなり、孫ばあさんに育てられた。母方、父方、どちらの祖母かわからない。孫ばあさんの家は春採と塘路の両方にあった。塘路から釧路まで、歩いて行った。私が7才位の時だ。着物一枚、前掛け一枚で、寒くてぬかって、足が痛い痛いと言いながら歩いたことを覚えている。春先に塘路から春採へ戻った。12才の時から、二、三年、小さい方のおばさんに連れられて農家で働きに池田に行ったり白糠に行ったりした。そのあとまた帰ってきて、孫ばあさんと暮らした。その間、米のご飯ばかり食べたので、昔の生活はあまり知らない。

孫ばあさんは壺井ツマという名だった。アイヌ名はわからない。春採の人で、塘路に嫁に行ったのらしい。

私は綱井善太郎に嫁に行った。私が40代の時に亡くなった。17で結婚した。私が結婚したあと、孫ばあさんは一人で暮らしていた。孫ばあさんの世話は商店をやっている姉娘がみていたので心配なかった。私は山の方の、昔、高村さんという人のいた所よりさらに上の、キラコタンと呼ばれている所に家があった。いま、「沼の上」という所だ。キラコタンには、偉い人が釧路から逃げてきて、私が昔住んでいた所の深い沢に逃げて隠れていたということだ。わき水がわいている。わしの孫ばあさんからそういう話を聞いた。わしのひこじいさんが、用足しに書いた物を持たされて、釧路の漁場に行って、米や味噌を貰って背負って来て渡したということだ。わたしが結婚してキラコタン (逃げて行った土地ということだ) に住むようになってから孫ばあさんに教わった。私の家は高台にあり、その深い沢 (沢の名は知らない) に水を汲みに行って使っていた。井戸を掘っても夏になると干せてしまうので、かんをもって行って汲んで来た。そんなひどいめに私は遭ってきた。洗濯、茶碗を洗うには雪をとかして使ったこともあった。飲み水は沢の水を使った。夫が出稼ぎに出ている間、子供としゅうとさんと暮らしていた。

[綱井チヨ氏]

うちの孫ばあさんは結婚する前は地主フクという名だった。伊良家に嫁いでできた私の父は

次男であった。畑のことがあったので、母方の姓を名乗って伊良から地主に改姓した。私が小学校4年生までは伊良カヨだった。父が自分の母の姓を名乗ったので地主カヨになり、きょうだい6人の長女である。岩手県の菊地という人と結婚して菊地カヨとなった。母の旧姓は増野という。増野光教さんの家が本家だ。増野さんの父が私の母の兄だ。

増野さんは父母を早くなくして、私の母方の孫ばあさんと二人で暮らした。養子縁組だが、一緒に暮らしていたのでアイヌ語が右に出るものがないくらいよくできるのだ。

祖父の伊良チカラは茶路の出身だった。一時は、祖父は船頭をしていたが、クラゲが目に入って失明した。それで、また茶路に戻った。父は西浜（昔の呼び名は下町）に住んだ。昔は父も母もでかせぎにでたので、茶路の祖父母のところによくあずけられた。祖母は白糠の人だ。親の家は浜にあり、祖母の家は茶路にあったが、しょっちゅう行き来した。歩いて川づたいに行くとは一時間位で着く。私は結婚後も白糠に居住している。

父方の孫ばあさんは内地から来た旅の日本人の子供だったそうた。だから、結婚するとき、とても苦勞したそうた。そういう子供が生まれたら殺してしまわなければならないくらい厳しかったそうた。だから、孫ばあさんは私に、チャピセブ cappisep「父無し子」でも、粗末にしないで大事に育てなければならぬ、と言った。

白糠には昔、ロシヤ人がよく来た。母方も父方もロシヤ人の系統だそうた。

子どもがいない奥さんは「暇を出される」。だいたい5年もなると言われるようた。

[菊地カヨ氏]

自分のイトクパは白糠の他の系統の人のイトクパとは大分違っている。(図7. 図版10参照)

[貫塩米太郎氏]

イトクパは兄弟が別れていても、系統がはっきりさせるために付ける。女にはない。

[貫塩米太郎氏]

祖母は慶応2年の生れだが、昭和10年代は70才代で、浜を歩いては薪を集めていた。また、ひまさえあればカエカしていた。天気の良いときは、家の外でキナ編みをした。

[増野光教氏]

伊良チカラの妹が増野氏の母で、増野氏の父の娘が伊良チカラの妻にである。

[菊池カヨ氏]

地主義雄氏は茶路に生れ、4歳のとき母を失った(大正15年)。その後和天別に差間(サシマ)シゲというお祖母さんがいたので、そこに移った。

[地主義雄氏]

#### 6-1-4. 親族名称

奥さんのこと、クコロ マツ ku=kor mat という。

[地主義雄氏]

ユポ yupo 兄  
サポ sapo 姉  
カラク karku 甥  
オンネ エカシ onne ekasi 年寄り  
ハポ hapo 母親

[増野光教氏]

## 6-2. 身体部位名称

パケ pake 頭  
クパケ ku=pake 私の頭  
クパケ ウェン ku=pake wen 私の頭が悪い  
パケ ピリカ pake pirka  
エアニ パケ eani pake あんたの頭(クアニ パケは言わないが、エアニ パケは言える。)  
クテケ アラカ ku=teke arka 私の手が痛い(クアニ テケ アラカ kuani teke arka とは絶対言わない。)  
クピセ アラカ ku=pise arka 私の腹が痛い  
ピセ アラカ pise arka 腹が痛い  
ヨシペ yospe 胃  
ラー ra 肝臓  
トゥル tur 垢  
チキリ cikiri 足  
キリポ kirpo 脂  
パケ pake 頭  
毛 知らず  
目 シキ siki  
耳 キサラ kisara  
鼻 エトゥ etu  
顔 ナヌ nanu  
口 チャロ caro  
歯 イマキ imaki  
でっぱ イマキ テシケ imaki teske  
舌 知らず  
あご ノクキリ nokkiri  
唇 知らず  
耳たぶ 知らず

耳穴 知らず  
おでこ 知らず  
手 テケ teke  
腹 ピセ pise  
気持ち、心 サンペ sanpe  
背中 セトゥル seturu  
腰 イクケウ ikkew  
足 チキリ cikiri  
膝 知らず  
首 知らず  
喉 知らず

[増野光教氏]

#### 6-4. 身体の世話

##### 6-4-5. お守り・まじない

具合の悪い時、何かたたりがあるからだ、と孫ばあさんは言って、ペヌブ penup(イケマの根)を、祈り言葉を言いながらかじってプップププ言って吹きかけられた。

[増野光教氏]

祖母の伊良フクはトゥス tusu する人だった。神のお告げみたいなものがある。生き物をそまつにするとよくないとか、こういうふうにすると授かりものがあるとか、昔はうるさかったらしい。

何か悩みごとのある人は、よく祖母を訪ねて来た。トゥス tusu は、炉縁をたたきながら、サコルベ sakorpe(詞曲)みたいに物を言っていた。例えば、イナウには家紋(イトツパ itoppa)があって、神にお願いするとき、イトツパをつけないといけなのだが、間違いをすると婆ちゃんにわかって悪いことが起きるのだとか、原因を言う。その言っているのを聞くと、とても恐ろしいものだった。孫ばあさんは、猟で遭難があることは一週間前に分かっているような人だった。先祖のたたりが孫、ひこに来ることもあるそうだ。そういうことを当てるのがトゥスだ。

孫ばあさんの所に何人か集まって、恐ろしい夢みて、オンネオロシペ onne orospe(大変なこと?)だ、などと話し合っていることがあった。そんなとき、どこそこの誰がこうだ、ああだ、だから、こうしないとオンネオロシペだ、と話していることもあった。

どうしても子どもができない時は、日本人から子どもを貰って育てることも多かった。また、子どものできない女の人は、モセ mose(カイグサ)を細くなって腹にしばっておくとか、白黒の糸3本ずつくらいをなつて、子どもが授かるようにタマサイ tamasay(首飾り)のタマ(子どものつもり)を一個入れ、ペヌブ penup(イケマ)の薄い輪切りをその両側に一個ずつつけ

たもの（レクトンペ rekutonpe）をアペフチカムイ apéhucikamuy（火の神）に年寄りが子どもをさずけて下さいとお願いして、子どものできない人の首にかけた。うちの孫ばあさんはよく人に頼まれてこのタマサイを作っていた。女の年寄り（姑でも信心のある人）が燠を寄せて火の神に祈る。その火で、タマサイの糸の両端を焼いて魂を入れる。火の神様は女にとって大事な神様だから、その魂をいただく。焼いてから火の神に祈って（イノイノイタク inoinoitak）、「火の神様、この女を健康な体にして子どもさずけてください」と言う。本人の首にかけてから紐を結ぶ。

カイグサ（モセ mose）をなつて、妊婦にお守りにつける。紐は何かの時にお守りになる。腰にまいてると、足をすべらして川に落ちた人がいても、投げてやって助けることもできる。孫ばあさんは、紐がお守りになるということを私に教えた時、天の岩戸の伝説の話をして、女の人が腰に巻いた紐をはずして隙間から入れて神様を助けた、という話をしてくれた。カイグサのお守りは、付ける前に炉辺で焚火にお祈りする。アペフチカムイ、ウサラワフチ apéhucikamuy usarwahuci（火の神）と言って、子どもが元気に育つように、子どもを守って下さいと願う。

お産が重い時は、年寄りが妊婦の体をさすっていた。大根の葉を煮て桶にあけて絞って、布につつんで裾をあたためたりするのも見た。スースーする草（名前忘れ）を腰につけたりした。ハコベをせんじて湿布に使ったりもしたようだ。

妊婦が死んだ時、お祈りの言葉が違ったようだ。子どもも死産の時は、妊婦とは別に埋葬したようだ。妊婦が死んで子が生き残った場合、ご飯つぶして布でつつんでしぼって、その汁を飲ませて育てた。

キセルのやにを子どものこめかみにつけて、虫の強い子どもを直した。袋に入れた輪切りのペヌプを赤ん坊の着物から下げてお守り（魔よけ）にすることもあった。また、ドブロクを作ると、酒を子どもの鼻の先に付けて虫切りにした。

[菊地カヨ氏]

## 6-5. 人の一生

第二学校（アイヌ子弟だけの学校）のことは知らない。私が通ったのは和人と一緒の学校だった。

[増野光教氏]

### 6-5-2. 出産

ポーコロ po korというのは（妊娠して）お腹が大きいという意味だ。妊娠した女性のことをポーコロベ po kor pe という。また、ホンコロ honkor とか、ホニコロ honi kor とか、ピセポロ pise poro という。

[増野光教氏] [菊池カヨ氏]

### 6-5-3. 葬礼

死体を包むキナは家の主婦が夫と自分のために前もって編んでおいた[増野光教氏]。死体を包むキナは、ライクル raykur (死人) のキナというが、人間一人を包むために床に敷くものよりずっと幅広だった。このキナはガマで編み、模様をつけない。包むとき折り曲げるが、折れないので、よい時期に採ったものだと思う。ライクルを包むキナの両端に平たいへら状の串(図21)を1本ずつ刺し、胴の部分には数本の串を刺し紐をかける。(串の刺し方ははっきりしない)

[地主義雄氏]

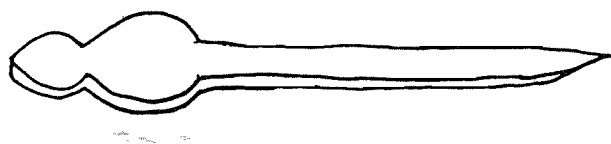


図21. ライクルのキナを留める串 [地主義雄氏]

## 6-7. 交易・通婚・戦争

厚岸アイヌが白糠へせめて来て向うが強かった。音別の手前のフレベツまで白糠アイヌが押されて来た。傷ついたものの血で川が赤くなったので、フレベツ(赤い川)という名が付いた、と孫ばあさんが教えてくれた。

十勝アイヌとは交流はなかったらしい。十勝に入るとアイヌ語が大分違う。日高になるとアイヌ語が半分は違う。釧路アイヌとは親戚でもないが仇同士でもなかった。

一年に一度内地から船が来て、米を持ってきたそうだ。クマ、キツネなどの皮と交換して手に入れた。トゥキ tuki もタマ tama も内地から来たものだ。

[増野光教氏]

ウチャシクマ ucaskuma(昔からの言い伝え)を一つだけ覚えている。たまに外国の船がこの沖に来た。釧路にシャモの役場があって、そこに教えることになっていた。フレシサムペンザイ hure sisam pencay(外国船)が来た時は、早く知らせろと言った。

[増野光教氏]

昭和2年、帯広の伏古に兄(貫塩喜蔵)がいたので行ったことがある。白糠では使わない言葉をいろいろ耳にした。

[貫塩米太郎氏]

足寄の人(アソルンペ asorunpe)と白糠の人とはだいたい似たイトクパを持っていた。本別と足寄のイトクパもやや似ている(親戚、従兄弟が本別にいたことがある)。陸別のイトクパがどんなものかは知らない。しかし、春採、美幌、標茶、弟子屈、十勝のイトクパはだいたい同じだ。

[貫塩米太郎氏]

## 6-8. こどもの遊び

子どもは、男の子は弓で遊ぶとか、女の子は産婆さんごっこするとか。私はませていたので産婆さんごっこをして遊んだ。昔はおばあちゃんたちが産婆さんをやっていたので、それにくっついて私も見ていたので、こう寝なさいとか、うなんなさいとか、そんな遊び方をしていた。

[菊地カヨ氏]